

シリーズ「肺がん」④

肺がん検診と低線量CT

独立行政法人国立病院機構 和歌山病院

放射線科 菊川 絢子

国立がん研究センターが発表している最新のがん統計によると、死亡数が多い部位として、肺は男性1位、女性2位、男女合わせて1位というデータがでてきます。肺がんには「腺がん」「大細胞がん」「扁平上皮がん」「小細胞がん」と4種類があり、歌舞伎役者の中村獅童さんが「肺腺がん」で手術を受けるなどの報道は、記憶に新しいところ。1cm以下で見された場合、ほぼ100%生存できるといわれており、初期段階で見られた中村獅童さんもお元気な姿で舞台に戻られることと思います。

否かを55〜74歳の重喫煙者を対象に大規模な臨床試験が行われた結果、胸部単純X線検診群に比べ、低線量胸部CT検診群の肺がん死亡率が約20%減少し、肺がん以外の原因も含めた総死亡も6・7%減少したことが報告されており、線量を低減しても質の高い検診が維持できることがわかってきています。

難しいため、肺がん検出を目的とする場合、あるいは胸部X線写真で異常がある場合には胸部CT検査を行うよう勧められています。そこで問題となるのは被曝線量に関することです。実際、胸部CT検査を検診で使用するには被曝線量が多いのではと危惧する声もあります。確かに若年から経年的にCTを施行すると放射線被曝によるがんのリスクは高くなります。しかし、胸部CT検査を用いた場合、胸部X線検査に比べて肺がん発見率が10倍程度高く、早期の比率が高く、治療成績も良好なことが知られているため、肺がんに対して高リスクの方はデメリットよりもメリットが上回るとして、胸部CT検査による肺がん検診が必要だと考える医療従事者も少なくありません。

ただ現在はまだ、低線量胸部CT検査による肺がん検診の死亡率減少効果の有無を判断する根拠が不十分とされ、集団が対象の対策型検診には採用されず、個人を対象とした任意型検診(人間ドックなど)としてのみ受けることが出来ます。前述の中村獅童さんも任意型検診で低線量胸部CT検査による肺がん検診を受けられ、早期肺がんの発見につながったのだと述べられます。

現在、肺がん検診は胸部X線検査を用いたものが主流で、厚生労働省のガイドラインでも死亡率減少効果があるとされ、高リスクの方に対して最初に胸部X線検査を行うよう勧められています。高リスクに該当するのは喫煙、慢性閉塞性肺疾患、アスベストに代表される職業的曝露、肺がんの既往歴や家族歴、高齢者などがあげられます。しかし、胸部X線検査では他臓器と重なったり、小さな腫瘍は見つけづらく

被ばくによるリスクはないとは言えませんが、肺がんに対して高リスクを抱える方にとって低線量胸部CT検査を用いた肺がん検診は、多くのメリットがあると感じています。和歌山県は全国でも肺がんでの死亡率が高く、検診が重要な地域でもあるため、当院でも低線量胸部CT検査による肺がん検診を行っています。これからも1人でも多くの方に受診いただけるように情報を発信していきたいと思っています。

な腫瘍は見つけづらくがん死亡率が減少する

線量胸部CT検査を用いた検診で、受診集団の肺がん死亡率が減少する